書　評・紹　介

Diane J. Macunovich

Birth Quake:The Baby Boom and Its Aftershocks

Chicago, The University of Chicago Press, 2002, 314pp. (Population and Development)

地震 earthquake ならぬ出生波動 Birth Quake というユニークなタイトルが示すように，本書は，いわゆる「イースタリン仮説」を概念的により精密化し，主としてアメリカについて，1980年代以降の動きも含め再検証するとともに，その射程範囲を大きく拡張しょうとするものである．

周知のように「イースタリン仮説」は，相対コーホート規模（これから労働市場に参入しょうとする若年男子世代と，その父親世代のコーホートサイズの比）が，男子の相対所得に影響を与え，これに対する適応行動として出生力変動が起きるとするもので，とりわけ，アメリカでは，戦後ベビーブーマー（1946年-1964年）が労働市場に参入し始めた頃に発生したベビーバーストを見事に検証し注目を集めた．しかし，その後，賃金決定メカニズムや国際人口移動の影響が異なる日本やヨーロッパなど，他の地域では必ずしも検証されなかったこと，また本国でも1980年代に入り相対コーホート規模が縮小に向ったにもかかわらず期待された男子の相対所得の上昇が起きず，近年，この仮説への関心は低下してきていた．

しかし，著者マクノビッチは，相対コーホート規模や相対所得の概念や，主要変数の定義を再度見直し精緻化するとともに，ベトナム戦争による若年労働力の動員や国際貿易・労働力移動などの経済環境要因も勘案し，新たに相対コーホート規模の成長率（つまり上昇局面と加工局面の非対称性）に注目するという工夫を加え，この仮説の全面復活を試み，それに成功していている．

さらに，本書で注目すべきは，この過程において，従来の「イースタリン仮説」の射程範囲を，出生力への直接作用のみではなく，他の社会行動への間接作用，さらには経済全体への波及効果へと，大幅に拡張している点である．

すなわち，マクノビッチによれば，相対コーホートサイズの作用には，次の三つの階層があるという．

1．相対コーホート規模の直接作用（First-Order Effect）：男性の相対所得，失業率，労働時間，労働力率，男女の大卒給与の高卒給与に対する格差，その他の一般的格差への影響

2．男性の相対所得の変化を通じての間接的作用（Second-Order Effect）：直接作用に対する人口学的適応の結果として，女性の労働力率と職業選択，男女の大学進学率，婚姻率と離婚率，出生率，犯罪，麻薬，自殺率，婚外出生率と，女性世帯主世帯，世帯構造，高齢者の引退行動などへの影響

3．経済全体への波及効果（Third-Order Effect）：平均賃金の成長率，財とサービスに関する経済需要，経済成長率，インフレーション，利子率，貯蓄率，株式市場の動向，産業構造，GDP，生産性などへの影響

このため，本書の構成も，まず第1部で，従来，検証段階で問題とされた相対コーホートサイズや相対賃金などの概念や主要変数の再定義が試みられ，続く第2部，第3部，第4部が，各階層ごとの記述に当てられている．

とりわけ，第3部の間接的作用では，女性の高学歴化や労働参加率の上昇，婚姻率の低下や離婚率の上昇など，いわゆる第二の人口転換に見られる様々な社会変動が，出生力低下の背景や原因としてではなく，男性の労働市場変化に対する人口学的適応の結果として詳細に検討されており，パラダイム転換的な議論として注目に値する．

また最後の第4部　経済全体への波及効果では，このような人口変動から超長期のマクロ経済変動を説明しようとする大胆な試みがなされており，1934年から1976年のデータを利用して1976年-1995年までの株価変動（Dow Jones Industrial Average）を再現し，さらに2040年まで投影するなど衝撃的な図表も散見される．詳細なデータや数式を入手し検討しない限り，その有意性はにわかには信じがたいが，今後の人口減少社会を考える上で，人口予測に何が期待される得るのかという意味で示唆に富む内容となっている．

（原　俊彦／北海道東海大学）